

# 講演会要旨

1. 開催日 2017年5月26日（金曜日）
2. 会場 3号館307号教室
3. 講演者 与那嶺一枝氏（沖縄タイムス社編集局次長兼報道本部長）
4. 演題 沖縄で起きていること、メディアが伝えていること

講演では、与那嶺一枝氏に沖縄で起きていること、沖縄の新聞『沖縄タイムス』の報道本部長として日々の報道現場で見聞きしたことや考えていることを語ってもらった。

与那嶺氏は米軍に関連した具体的な事件・事故を取り上げ、沖縄のメディアがどのような取材し、報道しているかについて『沖縄タイムス』を事例に紙面や写真を示しながら説明していた。特に、沖縄の節目となった1995年に起きた米兵による少女暴行事件、そしてその後の沖縄国際大学へのヘリ墜落事故（2004年）、米軍軍属による女性暴行殺害事件（2016年）、オスプレー墜落事件（2016年）など、具体的な事件・事故を取り上げ、その概要や背景、取材の様子や沖縄と在京メディアとの報道の差異などについて説明した。

また、与那嶺氏は「沖縄県知事の仕事の7割は基地問題に割かれる」という元県知事の言葉を紹介しながら、沖縄で繰り返される米兵・軍属による女性への暴力事件などの事件事故、その度に大規模な抗議集会、そして約束を守らない米軍の実態、米軍に関しては日本と異なるルールが存在することなどを解説した。さらに、進行中の東村高江のヘリパッド建設地や名護市辺野古の新基地建設現場、そして米軍基地に反対する市民に対して起きていることや警備をめぐるトラブルなど、米軍基地をめぐる起きていることの現状も報告した。その上で、「本土」で伝えられる沖縄の米軍基地をめぐる誤解・デマなどを紹介し、沖縄と「本土」との温度差なども語った。

会場には研究所のメンバーのほか、神奈川大学の学生や教職員、学外からの参加者もみられた。中には、もっと深く沖縄で起きていることを知りたいと、修学旅行で沖縄を訪れた近隣高校生の参加者もいた。在京の放送や新聞などメディア関係も参加し、沖縄のメディアの状況や在京メディアとの報道の差などについて議論もなされた。

（文責 後田多敦）

1. 開催日 2017年7月18日
2. 会場 3号館 B103号室
3. 講演者 寺田新先生（東京大学総合文化研究科）
4. 演題 スポーツ栄養～基礎から最前線まで～
5. 講演内容

“You are what you eat.”という栄養学の基本的な考え方から、スポーツの現場において、具体的に「何を」、「どのくらい」、「どのタイミングで」摂取すべきなのか、を東京大学の寺田先生にご講演頂いた。運動後の栄養補給は、運動中に減少した筋グリコーゲンの回復、および筋タンパク質の合成を促進する上で重要な役割を果たす。特に、同じ日に何試合もこなす必要のあるスポーツ競技においては、糖質を運動終了後すぐに摂取することで回復を早めることができる。ただし、翌日以降まで試合等が行われない場合、つまり筋グリコーゲン回復のための時間が十分にある場合には、運動終了直後に急いで糖質を摂取する必要はないことも示されている。また、日常的にトレーニングを行なっている競技者は、1日にタンパク質を体重1kgあたり2g摂取する必要がある。アミノ酸組成の違いから、動物性のタンパク質の方が植物性のタンパク質よりも好ましい。さらに、これまでスポーツ栄養の分野では重要視されてこなかった、脂質が筋萎縮を抑制する効果を持つ可能性についても報告されている。

運動と栄養補給については古くから研究されてきたテーマではあるが、未だ検討の余地が多く残されている。特に、栄養素を単独で摂取した際の効果に関する研究がほとんどであり、栄養素の組み合わせによる効果についてはまだまだ謎が多い。例えば、最近では糖質と牛乳を同時に摂取することで、糖輸送体を細胞膜上へと移行させるインスリンの分泌が刺激され、筋グリコーゲンの回復が促進されることが報告されている。栄養素の組み合わせは無限に近く存在するため、今後さらなる研究が必要だと考えられる。また、近年スポーツ科学の分野ではトレーニングによる骨格筋の適応の分子レベルでのメカニズムの解明が進んでおり、それに伴って新たに数多くのスポーツ栄養学的手法が考案されてきている。一方で、最近注目されている糖質制限食やケトジェニックダイエットなどについて、それぞれリスクがあることに十分な注意が必要である。

(文責 北岡祐)

1. 開催日 2017年11月29日
2. 会場 20号館433室
3. 講演者 八木君人氏（早稲田大学文学学術院）
4. 演題 初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場
5. 講演内容

共同研究グループ：各国近代文学の研究では、文字通り「各国」の研究状況とその方向性等々を多角的に検討していくことを目指している。今回は、現メンバーでは補えない領域である、ロシア文学をご専門としている方として、八木君人氏（早稲田大学文学学術院）をお招きして、「初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場」と題して、ご講演を頂いた。

まず、八木氏は、ロシア文学・文化研究をめぐる研究（学会）状況について、日本およびロシアの視点からパースペクティブを示した上で、ご自身のご専門について話題を移した。

八木氏の主たる関心領域である、ロシア・フォルマリズムについて、まずは事典類での説明のされ方が示された。この文学運動について、主要関係人物や、主な手法、運動の帰結（弾圧／構造主義への影響など）について、最大公約数的な評価を確認した上で、モスクワとペテルブルグという2つの中心があったことを指摘しながら、人的 - 地理的な動きと関わらせながらその動向を説明された。

その上で、八木氏は研究上の問題関心を、次のように示された。——文学をめぐる興味は、いわゆる感動と称されるものによるところが大きいと思われるが、にもかかわらず、なぜロシア・フォルマリズムに関わった人々は、詩学へと向かったのか。ここには、もとより研究者それぞれの、さらには文化的政治的背景も関わるだろうが、この問いを明らかにするために、八木氏によって豊富な引用が示された。そこでは、ロシア・フォルマリズムを担った主要な人物たちによる、すぐれて方法論的な議論にくわえ、社会や生活をめぐるとく素朴な感懐なども示されており、八木氏はそれらを読み解きながら、ロシア・フォルマリズム生成のモチベーションをしなやかに探りながら、それぞれの言説を意味づけていった。

今日、形式主義的な文学理論と目されがちなロシア・フォルマリズムの背後に、動的かつ多様な要素が当事者達の間にあったことを、あざやかに浮かびあがらせるご講演であった。

（文責 松本和也）

1. 開催日 2018年1月17日 18:30-20:00
2. 会場 神奈川大学横浜キャンパス 3号館 202号室
3. 講演者 木内久美子 (東京工業大学 リベラルアーツ教育研究院 准教授)
4. 演題 1930年代から1960年代前半の日本映画にみる「月島」の地政学  
— ノスタルジーと政治的無意識 —

5. 講演内容

この講演は、戦中から戦後（1960年代前半）にかけて「月島」で撮影されたシーンを含む日本映画の分析によって、「月島」をめぐる「ノスタルジー」の多面的構造を解説する試みである。

月島とは、狭義では1892年（明治25年）に完成した東京湾の埋立地（「月島一号地」）を指し、周辺の佃島、勝鬨、晴海と区別される。だが広義の「月島」はしばしば佃島をも包括する地域名として用いられており、今日この地域を知らない人々は二つの島をしばしば混同している。

埋立地は戦前、陸地側からみて「川向こう」と呼ばれ、貧しい地域として認識されていた。この証拠となる映像表現が当時の映画にも用いられている。だが戦中、東京の東側が空襲で延焼したのにたいし、「月島」地域はその被害を免れた。その結果戦前からの長屋が多く残り、その風景が佃の渡しのボンボン船（蒸気船）とともに、1950年代の東京下町の風景として映画で用いられた。

佃の渡しは、当時、隅田川に残っていた唯一の渡しであり、移動手段はバスや都電に移行していた。ボンボン船のある東京生活は戦前・戦中の日常風景であり、アナクロニクな表象であったといえる。

この講演ではここにみられるようなアナクロニズムの諸相を、一方では「ノスタルジー」への無意識的欲求、他方では東京湾の埋立地という地政学的視点との関係からを探ってみたい。

具体的には「ノスタルジー」の構造に示唆を与えてくれる新藤兼人『縮図』（1953）における翻案の手法や新藤自身の言説を分析する。この映画にみられる「ノスタルジー」の構造は、実は必ずしも同時代の別の映画監督（成瀬巳喜男、小津安二郎、川島雄三など）に共有されているわけではない。複数の映像を比較することによって、今日の観客が感じるノスタルジーと、当時の観客の暗黙の前提（交通機関（路面電車とボンボン船）や橋（勝鬨橋・相生橋）など）とを区別することも可能になるだろう。

（文責 村井まや子）